
寝台列車幻想号

龍ヶ崎 雄斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寝台列車幻想号

【著者名】

龍ヶ崎 雄斗

N2350F

【あらすじ】

寝台列車に乗った美代は、静まり返った中、不思議な少年と出会い、「この列車には君と僕しかいない」意味のわからないことを言いい、少年は美代の手を引いていく。

気がつけば私は、狭いベッドのある部屋にいた。

足もとに微かな振動があり、定期的にガタンゴトンと心地のいい音が鳴る。 そうだ、私は寝台列車に乗っていたんだった。

夏休みに入り、家でだらだらと過ごすのは損だと思つて私は遠い田舎に住んでいる親戚の家にお邪魔することにした。そこなら自由研究だつて昆虫採集にすれば簡単に済むし、何より静かで宿題にも集中しやすいし、私は田舎の空気が好きだった。

だけれど両親はお互い仕事に忙しく、何とかならないかと模索していた時に寝台列車の存在を知り、私はすぐこれに乗ることに決めた。

女の子一人で旅をさせるのは不安だつた両親は最初は反対したものの、引き下がらない私に負けてしぶしぶ個室を取ってくれた。そして、私は今ここにいるのだつた。

今何時だらう。 左腕を見て時計を忘れたことに気がつく。 もう、めんどくさいなあ。

ドアを開けてその隙間から顔をのぞかせてみる。廊下には人はいない。

妙に静かだつた。まるで私以外みんななくなつてしまつたかのように。

乗っている人はみんな寝ちゃつたのかな。じゃあ今は、真夜中なのかも。

私は時間を確認するため、ラウンジに行くことにした。

しんと静まり返つた廊下に、私の足音と規則正しいレール音だけが聞こえている。その静けさが、なんだか不気味に思えてきた。

もし今真夜中なら、私はいつの間に眠つたのだろうか。列車に飛び乗つたところは覚えているけれど、そこから記憶がない。疲れていつの間にか眠りに落ちてしまったのかもしれない。

ラウンジのドアを開けても、静けさは相変わらずだった。やはりここにも人っ子一人いない。

少し年代を重ねた時計が壁に掛けられている。私は体を斜めにしてそれをのぞきこんだ。

七時。七時？ そんなはずない。

それなら私とすれ違った人がいてもいいはずだ。

よく見ると、時計の針は動いていなかつた。秒針が中途半端なところで首をかしげて止まっている。なんだ。壊れているんだ。

しかしこのままだと本当の時間がわからない。こうなつたら仕方ないけれど、乗っている人の誰かに時間を訊こう。歩いていればそれ違うだろうし。

「この列車には誰も乗っていないよ」

ラウンジから出でていこうとする私に、声がかかった。

振り向くと質素なソファに少年が座っていた。

どこか不思議な印象がある男の子だ。私に向かつてここにこと微笑んでいる。

誰も乗っていない？ 私は少年を見ながら、きつと怪訝そうな顔をしてていることだろう。

「ここには、君と僕しかいない」

……さっぱり意味がわからぬ。

「訳わかんないんだけど、どういうこと？」

「君と僕がおそらくおんなじ理由で乗ってるってことを」「彼はさらに意味不明なことを口走ると、ゆっくりと立ち上がって私に手を差し伸べた。

「ついておいで」

私はまるで赤ん坊のように彼に手を引かれて廊下を歩いていた。相変わらず列車内は静まり返つており、一切の音を消し去つてしまつたかのようだ。 もしくは、彼の言う通りここには私たちし

かいないのかも。

「名前は？」

無言だった彼が前を向いたまま私に問いかけてきた。突然の質問に面を食らつた私は、その必要もないのに慌てる。

「え、えっと。美代」

彼は振り返る。さつきと同じように私にほほ笑みながら。

「へえ、いい名前だね」

もともと恥ずかしがり屋の私は、それを聞いて耳まで真っ赤になってしまった。そんなことを言われたのは、生まれて初めてである。前を先導していた彼は、いきなり止まつた。

よそ見をしていた私は危うくぶつかりかけ、寸前で立ち止まる。

「着いたよ」

目の前に重々しい扉がそびえ立つていた。まるで門番みたいだ。ふとそれを連想させた。私の身長2つ分くらいあるその上に、「運転室」とあつた。

彼はまつたく躊躇もせずにノブを引いて扉を開けた。見た目通りの重々しい音とともにしぶしぶとそれは開いていく。

中に入ると、またたくさん機械が目に入った。

温度計のようなものにたくさんのスイッチ、そして何かのレバー。だけれど、そこに人の姿はなかつた。

「どうやつて動いてるの、これ」

思わず私は絶句してしまつた。運転手なしで列車が動くわけないだろうし、自動操縦にしても、車掌さんの誰かがいてもよさそうだ。

だけれど、ここには今私と彼しかいない。

「だから言つたでしょ。僕らしかいないって」

ごく当たり前のようだ、彼は言つて。

私は意地になつて正面を見据えた列車の窓をのぞいてみようと試みたけれど、身長が届かなくて背伸びしても無理だった。そりゃあ、クラスで一番小さいからなあ。

「ねえ」

必死につま先で立とうとしている私の肩を、彼は背後から軽くたたいた。びっくりしてその場で尻もちをつき、私はまた真っ赤になる。

彼はそんな私をくすぐすと女の子みたいに笑いながら言った。
「旅をするんだつたらさ、どこへ行つてみたい？」

唐突な質問だ。それに今そんなこと聞いてどうするんだろう。人の前で恥をかいてまだ真っ赤な私は、半分やけくそだった。

「えーっと、宇宙かな」

すると不意にエレベーターに乗った時のよつた浮遊感に襲われたかと思うと、ガタンゴトンといつレールの音がなくなつた。
「見て」「らん」

背の届かない私は、彼に手を貸してもらつて窓の外を見てみた。そしてまた尻もちをつきそになつた。

窓の外は星空のような風景が続いており、その中央に收まるようにして青い地球が私たちを見据えていた。紛れもなく、あれは地球だ。私たちが住んでいる、水の惑星。

「この列車はね、好きな場所に連れてつてくれるんだ」

彼は何の変哲もなく微笑んだまま。

「ち、地球つて、ほんとに青いんだ……」

呆気にとられた私は、間抜けなことを言つていた。

それから私たちは、海の中へ潜つてみたり、念願の海外旅行に向いたりもしてみた。

窓の外を魚の群が優雅に泳いでいたり、世界遺産の遺跡を見たりするうちに、私はすっかり楽しくて仕方なくなつていった。自然に飛び上がつたり、大声で笑つて拍手をしたりしてしまう。

なんて楽しいんだろう。こんな気持ちは、小さい頃にお父さんとお母さんに手を引いて連れていつてもらつた遊園地以来だ。それから、一人は忙しくなり、我なんかに構つていられなくなつた。

そのことを考えるとちょっとだけ悲しくなつたけれど、すぐそれは楽しさの感情に埋もれてしまった。

しばらく経ち、イルカの行列を指差してはしゃぐ私の肩に、彼は優しくそっと触れた。振り向いてみると、彼は悲しげに眉を下げている。それでもまだ微笑んだまま。

「残念だけど、もう時間だよ。君は帰らなくちゃ」

「え？ やだ。我まだここにいたいよ」

こんなに楽しいのに、こんなに心の底から笑っているのに。帰りたくない。戻りたくない。両親に気を遣う日々に。本当はもっと構ってほしいのに、もつと見ていてほしいのに、大丈夫だよって無理して笑う時間に。そんなの、もう嫌だよ。

次々とそんな言葉が溢れ出し、私はいつの間にか泣き出していた。まるで小さい頃に戻ったかのように。

そんな醜い私を見ても、彼は優しく微笑んでいた。全部包み込んで、私の肩を優しく掴む。

「君はさ、子供ながらに沢山の悩みを抱えてる。僕だってそうなんだ。誰だってたくさんのが悩みに押し潰されそうになってるんだよ」けれど、と彼は言つ。

「この列車にいる内はさ、そんなの吹き飛んでたでしょ？」

ホントだ。あれほど巨大でどす黒い問題は、楽しさの中に埋もれてしまつていて。最初から、そんなものあつたのだろうかと疑うほど、問題は小さくなつていた。

「また悩んだり寂しくなつたらさ、いつでもおいでよ」

言いながらも、彼は少し恥ずかしげに頬を搔いた。それが、彼の見せる初めての仕草だった。ふふ、と笑いが込み上げた。

「また会えるよね」

お互に見つめ合つたまま、私は訊く。答えはわかつていただけど、彼の口から聞きたかった。彼は力強く頷く。

「またすぐ会えるよ」

やがて規則正しいガタンゴトンというレールの音が戻ってきた。

微かな振動が、心地よく私たちを揺らす。

「もう目覚める時間だよ」

彼がそう言つて微笑んだ瞬間、目の前が急に光に包まれて何も見えなくなつた。

またすぐ会えるよ。

彼のその言葉が、私の頭の中で繰り返されていた。

まもなく、ホームに到着いたします。降りる際はお忘れ物がございませんよう、ご注意ください。

列車のアナウンスが聞こえて、私は狭いベッドの上で目を覚ました。

窓の外は既に明るく日の光が差しており、温かかった。

私はふと自分の肩に触れてみる。彼が掴んでいた感触が、まだ残つている気がした。

あれは夢だったんだろうか。夢だとしか思えないけれど、そういうじやなかつたかも。もしかしたら。

出来れば、夢じやなかつた方がいいな。

次の駅が目的地なのに今更気付き、私は慌てて荷物をまとめ始めた。

列車を降りると、目の前に自然に囲まれた風景が広がっていた。体を伸ばしてから、ゆっくりと歩き出す。ビルやたくさんのお店に変わつて、田んぼや畑が道路脇に続いている。少し迷いながら、やがて私は親戚の家の前に着いた。インター ホンがないので、玄関の引き戸を直にノックした。

「はーい」

中から元気な男の子の声が聞こえてきた。そつこえは親戚のおばさんには男の子がいるんだつた。

どんな子かな。仲良くなれるかな。あれ、でもこの声聞いた
ことがあるよ……。

引き戸が目の前でゆっくりと開いていく。そこから覗かせた男の
子の顔を見て、私は啞然とした。

「ほらね」

彼は私に向かつて、にっこりと微笑んだ。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。
何となく寝台列車の話が書きたかつたんで書いてみました。
本当に何となくですので、ちょっと無茶苦茶ですがお許しを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2350f/>

寝台列車幻想号

2010年10月8日15時59分発行